「えっ、ぁ……ん……ここ、どこ……？」
　つい先ほど意識を失っていたらしい少女の口からもれつ呟きには不安の色が濃い。
（私、たしか観光旅行に〇〇国にやってきて、それからホテルまでのバスに乗って……それから……どうしたんだっけ……）
　少女は必死に思い出そうとするもののそれ以上記憶を遡ることができないでいた。
　今少女にわかっていることはそう多くない。
　目隠しをされ、部屋の中の様子にすら見当はつかず、両の手足はしっかりと固定されていて動くことはできそうもない、その上、意識が途切れる前と今で身に着けている衣服に違いがあった。
（なんだろうこれ……レオタード……？　肌に吸い付くみたいな、すごい密着感……誰かに着替えさせられた……？）
　自らの想像に少女は全身からぶわりと嫌な汗が噴き出るのを感じ、その考えを頭から追い出すかのように、頭をぶんぶんと振って、声を張り上げる。
「ど、どうしてこんな事に……？　誰か！　誰かいませんか！？　外して、これを外して下さい！」
　あらん限りの声で叫びながら、拘束を逃れようと体を揺らす。
　拘束具に繋がれた鎖が音を立てるのに合わせ、彼女の長い黒髪と大きな胸が震える。
　そうしてしばらくの間少女は声を上げ暴れていたものの、周囲から何の反応も返らない事を悟ると、俯いて唇を噛み締めた。
　得体のしれない状況に置かれて、ふつふつと湧き上がる恐怖心に少女は押しつぶされそうになっていた。
「あら、お目覚めになりましたか」
　不意に少女に声をかけたのは、その部屋の中にどこからともなく現れた一人の女性だった。活発な印象を持つ少女とは反対に、修道服に身を包むその女性の声にはどこか優しさを感じる響きがあり、少女はその声にひどく安堵した。
「あ、あのすいません、この目隠しを取ってくれませんか？　それとこの拘束も解いて、できれば誰か人を呼んできてもらえると……！」
　女性の優し気な声と、やっと人に出会えたという安堵もあるのだろう。少女は早口でまくし立てるように次々に思い浮かんだままに言葉を発する、自分の話している相手が何者なのかも考えずに。
「すみませんアリサ様、それはできない相談ですわ」
「えっ……？」
　名乗った覚えもない自分の名前を呼ばれ、少女、アリサはようやく真っ先に思い浮かぶであろう考えに至った。この女性こそが自分を監禁している張本人ではないのだろうかと。
「端的に貴方の置かれた状況を説明いたしますわ。貴方は我が××教に特別なお客人

として招かれましたの。少々手荒な歓迎方法になってしまったことは、教祖である私が深くお詫びしますわ」
「××教……？」
　各国を旅して回る趣味をもつアリサはその名前にに聞き覚えがあった。つい先日普段と何ら変わりない旅行のつもりで訪れた国で、それなりに知られている宗教の名前。
　その教義があまりにも珍しく、アリサはその名前をたまたま覚えいたのだ。性交を推奨し、精液を神に捧げる事で幸せに近づく事を目的とする宗教団体、××教。
　それを思い出したアリサは寒気に体を震わせた。
「どうやら、我が教団についてはご存じのようですね……でしたらアリサ様、貴方ががここに招かれた理由にも、もうお気づきでしょう？」
　教祖を名乗る女性は満面の笑みを浮かべ一歩アリサの元へと近づくと、耳元へと口を寄せ、少女の股間へと手を伸ばしゆっくりと指先を這わせながら囁く。
「そう、アリサ様……あなたが、フタナリだからです」
　教祖の手が、可愛らしい少女の体に似つかわしくない男性器をきゅっと優しく包み込む。
「んっ、ぅ……っくぅ……」
　すると、アリサの口から苦しそうな、切なそうな、短い吐息が小さく漏れた。それは、まぎれもなく彼女の体とその男性器が繋がっていることをはっきりと示していた。
「フタナリの男性は通常の男性とは比べ物にならない絶大な精力を持っています。どれだけ射精しても決して尽きる事のない精力……。精液を捧げる事で神に信仰を示すこの××教において、フタナリは言わば神に遣わされた巫女。是非とも貴方には私の元に来てほしいのです」
　耳元に流れ込んでくる教祖の言葉には陶酔するような響きと、明確に感じられる程の本気さが見て取れた、それ故にアリサはより一層の恐怖を感じ身を固くする。
「もちろんタダで、とはいいません。普通に生きていては一生味わえないでしょう快楽を、貴方に差し上げますわ」
「そんなものいらないわよ！　私はそんな変態じみた宗教なんかにこれっぽちも興味ないんだから！」
　話を進めようとする教祖に、アリサは食ってかかる。未だに恐怖こそあれど、相手の正体が明かされ、こうして拘束されている理由がはっきりとした今、理不尽な仕打ちを受けている事への怒りがふつふつとわきあがってきていた。
「どうしても協力いただけませんか？」
「嫌」
　取り付く島もなくきっぱりと断られ、教祖は困ったように頬をかく。
「でしたら、一つ勝負をしませんか？　我々はアリサ様がそんなもの、と、一蹴された快楽を貴方に一時、施しましょう。貴方はそれに耐えるだけでよいです。仮に絶頂

されてしまっても構いません。貴方が自ら我々に協力したいと言わない限りはアリサ様の勝利と言うことで、無論、貴方が勝てばすぐさまこの状況から解放しますし、それなりの謝礼も用意いたします、いかがです？」
「勝負もなにも、暗に受けないとずっとこのまま拘束し続けるって言ってるようにしか聞こえないんだけど」
「協力して頂けるというのなら直ぐにでも解放いたしますわ」
　なんの解決にもならない教祖の提案に、アリサは舌打ちを返す。
　物腰柔らかで、どこか優しさを感じる声色をしながらも、自分の意思を決して曲げない教祖の態度に、アリサはみっともなくいの一番に彼女に助けを求めてしまったことを恥じていた。あのような失態はもう金輪際この女の前で晒してやるものかと心に誓いながら、アリサはゆっくりと口を開く。
「どうせ、飲まなきゃ解放してくれないっていうなら、やるしかないでしょ。私の方から負けを認めなきゃいいって事でしょ？　でも、ちゃんと時間なりなんなり制限はかけて。こんな不快な事一生続けられたらたまらないわ」
「そうですね……では三回。三回アリサ様が射精するまでに我々がアリサ様を勧誘できなければ、約束通りアリサ様を解放し、なおかつこの国にいる間、何不自由のない生活を約束しましょう」
　この教祖の目的や、快楽といった言葉から勝負の内容に関してなど、大方の予測はついていたものの、改めて面と向かって射精という言葉と共に自分の名がかたられる事にアリサは顔を赤くする。
　気丈に振舞ってはいるものの、アリサは年頃の少女である。フタナリという体のコンプレックスもあって、彼女の性に対する羞恥心は人一倍強い。
「わかった。それでいいわ」
　それでもなお勝負を受けなければ埒の開かないこの状況に、彼女は半ばやけっぱちに答えを返す。
　それが、教祖の目論見通りだとも知らずに。

「ルーシーいらっしゃい」
「はい、教祖様」
　両者の同意から数分後、教祖は部屋へと一人の信者を招き入れいていた。
「こちら、私の右腕のルーシーですわ。小柄で可愛らしくて、とってもエッチな事が上手ですの……と、紹介してもアリサ様にはルーシーの姿は見えないのでしたわね
「わかってるなら、目隠し外してくれてもいいのよ？」
「アリサ様の提案を飲みたいのはやまやまですが、せっかくお似合いですしもう少しそのままで」

　本気なのか冗談なのか、軽い笑い声と共に言う教祖に対し、アリサは苛立ちを覚える。
　アリサとて簡単に目隠しを外して貰えるとは思っていなかったが、わざわざ煽られるような事を言われるとは毛ほども思ってはいなかった。
「改めまして、教祖様のお手伝いを務めさせていただきますルーシーです」
　アリサよりも一回り程小柄な少女、ルーシーは、丁寧な所作で一礼をすると背筋を正してその場に佇む。
「御託はいいの、とっとと始めて……」
「あら、もう待ちきれませんでしたか？」
「そんなわけないでしょ！　私はこんな所出て早く帰りたいの！」
　それはアリサの紛れもない本音であった。監禁されているというだけで異常事態だというのに、その上拘束されて、人前で三度も射精させられるというのだ。ルーシーというギャラリーが一人増えたこともあり、言葉の割に、アリサの顔は耳まで赤く染まっていた。
　まだ裸身を晒しているわけでもないのに既に羞恥に悶えるアリサの様子に教祖は、口角をゆるく上げて満足げに笑みを浮かべる。
「私としては、できるだけ長くいていただきたいのですが。しかたありませんね……。ルーシー初めて」
「はい、では失礼しますアリサ様」
　小柄なルーシーが自分の足元に屈んだ気配を感じて、アリサは小さく息を飲む。
　静かな部屋の中で、アリサは自分の心臓の音が周りに聞こえているのではないかと心配になるほど早鐘をうっているのを感じた。
「ひっ、ぁ……！」
　ルーシーの指先がペニスに触れた瞬間、アリサは思わず声を裏返らせた。身構えていたとはいえ、何も見えず、いつ触れられるともわからない状態で敏感な場所に触られた事で、声を我慢することができなかったのだ。
「いい声ですわアリサ様、もっともっと貴方のよがる声が早く聞きたいですわ」
「ちょっと、驚いただけよ、誰がよがるものですか……！」
「そうむきにならずともいいのですよ。どうせ射精はするのですから、快楽を楽しみましょう？」
「こんな状態で楽しめだなんて、頭おかしいわ……！　っ……！」
　教祖とアリサが会話をする間もルーシーはアリサの肉棒に対しての愛撫を淡々続けている。レオタード越しに指を這わせ、裏筋を重点的にゆっくりと撫で上げる。根元から先端へ向けて、指先と共にじんわりと快感が走るのをアリサは感じていた。
（この程度なら、全然大したことはないけど……。なんだろう、レオタード越しの筈なのに、すごく指先の温度や肌の質感がわかるような……まるで直接触れられてるみ

たいな、不思議な感覚……）
　下から上へ、指を増やし、圧迫の仕方をかえ、時には強く、時には優しく、何度もアリサのペニスをルーシーは丹念に撫で上げる。
　決して強い刺激ではなく、まるで何かを確かめるような動きを繰り返され、徐々にアリサのそれは固くなり始めていた。
　とはいえ、それは単純な生理反応によるところが大きく、アリサは拍子抜けして、余裕の表情を浮かべている。
「この程度で一生味わえないような快楽？　全然大したことないじゃない」
　鼻をならし、笑いとばすようにして二人を煽る彼女の姿に、教祖はくすりと小さく笑う。彼女の口角がにっと吊り上がったその笑みがアリサに見えていれば、もしかすれば、多少の危機感を抱いていたかもしれない。
「そう焦らないでくださいアリサ様。まだまだ勝負は始まったばかり。最初から飛ばしてしまっては盛り上がりに欠けますし……何よりアリサ様がもちませんから」
「どうだか。それともアレ？　あえて緩く刺激してずっと監禁してようって魂胆？」
「そういうわけではないのですが……」
　困ったように言いながら教祖は小さく首を傾げ、ルーシーへと口を開く。
「では、ルーシーそろそろいいですね？　アリサ様が待ちきれないご様子ですから」
「わかりました教祖様」
「あぁ、まだお口を使ってはいけませんよ」
　ルーシーは一つ頷くと、両手でアリサのモノを軽くきゅっと握りしめる。レオタードは見た目以上に伸縮性が高いのか、手前にモノが倒され、ペニスを布地で包むように掴まれても生地が引っ張られるような感覚はない。
「それとアリサ様、できるだけ勃起は我慢したほうが賢明ですわ。あまり早々に勃起してしまいますと、射精までの間なが一く快感を感じてしまうことになりますから」
　教祖の不思議なその言葉の意味を考える暇はアリサにはなかった。
「っん、ふっぇ、あっ……！？」
　アリサのまだ柔らかなそれを、ルーシーがしごき始たのだ。
　裏筋に親指の腹を当ててくにくにと上下にうごかしながら、シコシコとリズミカルに手を上下させ、勃起を促すように、肉棒が揉みしだかれる。
「ふぅ、っんん……！　はっはぁ……っんく……」
（さっきまでより、ずっと気持ちいい……けど、この程度なら全然平気……）
「アリサ様のおちんぽ、ルーシーの手の中で熱くビクビクと脈打ち始めています。気持ちいいのですね？　このまま続けさせていただきます」
「い、言わなくていいから……」
　自分のモノの状態をルーシーの口から説明されて、アリサはカッと頬が熱くなるのを感じた。

　淡々とした口調ながらも、舌ったらずな所のある可愛らしい声。おそらくは自分よりも年下の女の子に自らの体の秘密を知られ、それどころか、快感を引き出すように弄ばれているという事実に、今更ながらアリサは恥ずかしさを感じていた。
「お恥ずかしいんですかアリサ様？　綺麗でご立派なおちんぽですし、何も恥ずかしがる事はないとおもいますが」
　他人にペニスを触られる、どころか、人目にさらした事のないアリサはレオタード越しに透けるそれをまじまじと観察されている事を意識するとより一層恥ずかしさに頭の中を支配されてしまう。
　拘束され、腰も引けぬ状態で身をよじり、膝をこすり合わせ、少しでも隠そうと試みるものの、とっくのむかしにルーシーの両手で固定されたペニスはただその手の中で硬さを増していくばかりである。
「あらあら、まだ勃起しきってないのにカウパーが溢れてきてるわ」
「か、カウパー……？」
　耳元で教祖に囁かれた聞きなれない言葉にアリサが聞き返すと、ふっと教祖が耳元へを息を吹きかける。
「ひゃっ、ぅんっ！？」
「我慢汁とか、先走りだったらわかる？　とぷとぷ溢れてきて、レオタードにエッチな染みを広げて、ここまでやらしいにおいが昇ってきてるわ」
「っ――！　う、うるさい！　黙って進められないの！？」
　自らの知る言葉で改めて説明されて、恥ずかしさにアリサは声を荒げる。
　本人はできる限りすごんだつもりであったが、徐々に強くなる快感と恥ずかしさに腰をひいて、囚われた状態のまま叫び声をあげるアリサの姿を見て気圧されるものなどどこにもいないだろう。
「心配しなくてもそろろ、会話も覚束なくなるでしょうから。少しだけ黙っていますわ」
「っ、馬鹿にしないで、このくらいで、喋れなくなるなんてっ――ん、ひっ、ぁ！？」
　アリサの言葉を遮ったのは、ルーシーのちょっとした軽い手の動きに過ぎなかった。
　レオタードに染みを作り、布地から溢れ出したカウパーを指先で掬い取り、鈴口をこすり上げる。
「ふっ、ぁあっ、やっ、ぁあ💛」
　その度にアリサの口からは甘い声が漏れて、半勃起したおちんぽがびくりと脈打ち硬さを増し、さらに沢山のカウパーを溢れ出させる。
「そろそろ本格的にしますねアリサ様。先ほど教祖様もおっしゃられましたが。勃起だけはできるだけ我慢されたほうがよいかと……加減はできませんが」
　言葉と共に、ルーシーは手の平を亀頭に押し当て、レオタードの下赤く熱を持ち始めたそこをゆっくりと撫でた。

「ひっ、ぁはぁあっ！？　それ、それぇっやだっ、やっ！　しげき、刺激つよっ――💛」
　体が跳ね、彼女を拘束する金具が音を立てる。逃げ場のない腰を左右に揺らし、少しでも快感を逃がそうとするアリサであったが、ルーシーはそれを許さない。
　そのまま、我慢汁をおちんぽの幹全体に塗り広げるように、激しい手コキが始まった。
「いっ、ぁあっ、ひっぅ、ぁああ💛　ひっん、ふぅう、うっくぁあ💛」
　カウパーを吸い込み、ぬらぬらと光滑るレオタード越しにおちんぽをコキ上げられて、アリサは声にならない嬌声を上げる。目の細かい布に粘液を染み込ませ、敏感な部分を磨くように擦られる快感。
　殆ど勃起しかけたおちんぽに強い快感を送り込まれて、声を殺す事も、先ほどまで感じていた羞恥心も、もはやアリサの頭の中からはすっぽりと抜け落ちてしまっていた。
（っ、き、気持ちいい！　すごい、気持ちいい、のに……！　一番、いいところ触ってくれなくて……！　もどかしいよぅ……！）
　フタナリは例外なく精力が強く、当然アリアも例外ではない。週に片手では足りないほど自慰をすることも珍しくはない彼女は、自分がおちんぽのどこで感じるかをよくわかっていた。裏筋と亀頭との間、カリのくびれ、そういった自分の弱点を先ほどからルーシーは一切刺激してこない。
（自分でするより全然気持ちいい、のに……もっと気持ちよくなれるのわかってると、もどかしく感じちゃう……！　っこんな、こと思っちゃダメ、なのに……）
「そろそろ、ですわね」
　教祖のその言葉がアリサの耳に届いていたのか、それは定かではなかったが、ちょうどその次の瞬間、アリサの口から、一際かん高い嬌声が上がった。
「んっ、ひっぁ、ああっあっんん――！？」
「勃起、してしまいましたねアリサ様」
「レオタードが動き出しましたわね、あらかじめ注意はしておきましたのに」
「な、何を言って、ひぅぁあ、なに、なにこれっ……！　なに、なにかがおちんぽに、吸い付いて……！？」
　自分の身に何が起きているのか理解できず、鎖を鳴らしアリサが暴れるものの、拘束はびくともしない。その間にも、彼女の身に起こる変化は一向に止まる様子を見せなかった。
「見えないんですものね……ふふ、教えてあげましょうか？」
「なに、私の体に何したのよ！」
　教祖がもったいぶるように焦らす間にも、アリサは自らのペニスから登ってくる快感に身をくねらせる。ルーシーの手コキとは全く違う、肉棒の根元の方からじわじわと包み込まれ、一斉に撫で上げられるような快感に腰の震えが止まらない。

「アリサ様が寝ている間に着替えさせたそのレオタード、ただのレオタードではなく自らの意思を持って動く、触手レオタードというんですの」
「っは、ぁ！？　なに、それっ、いみわかんなっ、ひぅ！？」
「嘘じゃないのはもうわかってるいんじゃないですの？　そのレオタードは一本一本の繊維が極細の触手で編まれているの」
　説明をしながら、教祖は人差し指をつぅっとアリサの肉棒の裏筋へと這わせる。
「そしてぇ、一本一本の触手は着用者の勃起に反応して、おちんぽに寄り集まって、包み込んで、吸い付いて……ほら、わかるでしょう？　ここと か、浮き出た血管の形にまでピタッと吸い付いて、素手で触れられるのと感触も変わらない」
「ふっう、んんっ💛　はぁ、や、やだそんなのきもちわる、っ、やっらぁ💛」
「嫌がってるにしては声が甘いですわねアリサ様、おちんぽもほら、こんなに勃起して。ねぇ、もしこのままさっきみたいに手コキされたら、どうなってしまうんでしょうね？」
　囁かれた言葉に、ゾクリ、とアリサの背が震える。
「だっ、ダメダメダメぇ！　そんなの、したら、し、しちゃったりゃぁ💛」
（うそ、うそうそ、嘘でしょ……！　今でもおちんぽ、全体ちゅ、っちゅってされて、ぐにゅぐにゅ、ぬるぬる這いまわって、頭おかしくなりそうなのに……また、されたら……されちゃったら……💛）
「心配しなくてもまだ最初の射精ですから……遠慮なく、普通では絶対に味わえない快感で、きもちよくびゅ、びゅーってしてくださいね？」
　教祖の目配せを受け、手コキを止めていたルーシーが再び動きを再開する。
　ガチガチに勃起したペニスは半立ちであった先ほどよりも扱いやすいのか、手指の動きはますます淀みなく、アリサを射精に導こうとしている。
「あっ、あっ、あっ、あぁあ――！？💛　ごしごしと、にゅりゅにゅりゅ、いっしょに、はっ、やっ、だめだめえっ💛　おちんぽ、とけりゅ、とけて、なくなっちゃうのぉ💛」
「勃起するまでの威勢の良さはどこへいってしまったんでしょうね？　そろそろ、最初の射精してしまいましょうか。神への供物に、特別に濃いものをたっぷりとお願いしますわね💛」
　強すぎる快感に翻弄されるアリサに、教祖の声はもう殆ど届いてはいなかったものの、次の瞬間に感じた自らの性器への刺激には、彼女は全身を使って反応を示してしまう。
「ひぅ、ぁああ、そこ、そこはだめだめ、ほんとにぃ💛」
「最初に触った時に確認しましたけれど、アリサ様は裏筋のここと、カリの括れが弱点ですね……？　存分にイキ狂ってください」
　勃起する直前まで、もどかしいと思い、触れてくれればと願ったその場所に今更に

なてルーシーの手が伸びる。加減のない指でおちんぽを磨くような容赦のない動きについにアリサは限界を迎えた。
「あっ、ぁあ、ひっく💛　いくいくいく💛　いっちゃ、ふ、ダメでる、でるぅううう💛」
　ガクガクと膝が震え、のけぞるようにして派手にアリサは絶頂する。
　いきり立ったペニスから勢いよく吹き出そうとし精液は、たちどころに鈴口へと集まっていた触手によって吸収されていく。しかし、あまりの射精の量にか、吸収の間に合わかった精液がレオタードを押し上げ、コンドームの先のように膨れ上がって、一時的にその中へ精液を貯める。
「あっあ、ああっん💛　だめ、いって、いってるから、だしてるからぁ💛　しこしこ、やめ、やめて💛」
　アリサの弱々しい懇願にも耳を傾けることはなく、ルーシーはさらに精液を絞り出そうとおちんぽをこき続け、触手たちもその動きを止めることなく、アリサの官能を限界まで引き出そうとしていた。
「あぁ、これがフタナリの射精、なのですね……なんて神秘的なのでしょうか。アリサ様もとってもかわいらくして……私見ているだけでぞくぞくしてしまいます」
「量も、濃さも、一般の信者達とは比べ物になりません。アリサ様にはやはり巫女として教団に身を置いていただきたいですね」
　長い射精を終え、拘束具に身を預ける形で脱力しているアリサの耳にはそんな二人の会話の内容を聞き取る気力すら残っていなかった。快感の余韻に未だに体はびくびくと跳ね、レオタードの下に隠された大きな両の胸の先端は生地を押し上げその存在を主張している。
（こんな、こんな快感知らない……こんなのずっと受けてたら頭変になる……絶対こいつらの仲間になんかなっちゃいけない……💛）
　ぼぉっとする頭でそう思いながら、アリサは肩で息をしながら呼吸を整える。快楽の余韻はまだ当分ぬけそうもなかったものの、一際つよい精力をもつフタナリの体は既に回復を始めている。
「どうですかアリサ様？　我が教団の実力ははっきりとわかっていただけたと思いますが。自ら進んで協力する気になっていただけましたか？」
　呼吸が落ち着き始めたころ、頃合いを見計らってか、教祖はアリサへと再び勧誘の言葉を投げかける。
「はぁっ、はーっふっ、ふぅ……💛　っ、誰が協力なんてするもんですか。こんな得体のしれない器具まで使って、貴方達頭おかしいわ」
「あらあら……お気に召しませんでしたか？　触手達が動き始めてからというもの、アリサ様の乱れ様といったらそれはそれは可愛らしかったのですが……」
　本心なのか、それとも挑発なのか、口調こそふざけているものの、教祖のどこかう

っとりとした様子に、アリサは寒気と怒りを覚えながら声を荒げる。
「っ、こんなの気色悪いだけで気持ちいいわけないでしょ、とっとと脱がせなさいよ！」
「気色悪いだけ、でしたら別に問題はないのでは？　我々はただアリサ様に、教団から提供できる快楽がどれほど素晴らしいかしっていただき、我々に協力するメリットとして認識してほしいだけですから。感じていないというのであれば、あと二回射精してそのまま堂々とここを出ていくだけの事違いますか？」
　口をついて出た、弱音にも近い言葉に対しまっすぐな言葉で返されたアリサは言葉を詰まらせ、そして、改めて思い直す。
（そうよ、結局最後の最後、私が負けさえ認めなければこの勝負は私の勝ち。いくら気持ちよくたって、頭さえ縦に振らなければどうとでもなる……）
「っ、ええ、そうね。たしかにそうだわ……。早い所終わらせて、こんな不快な所すぐに出ていってやるわよ」
「その意気ですわ。では早速二回目を始めましょうか。それとももう少し休憩をなさいますか？」
「いらないわ。とっとと始めて頂戴」